

清武町埋蔵文化財調査報告書 第10集

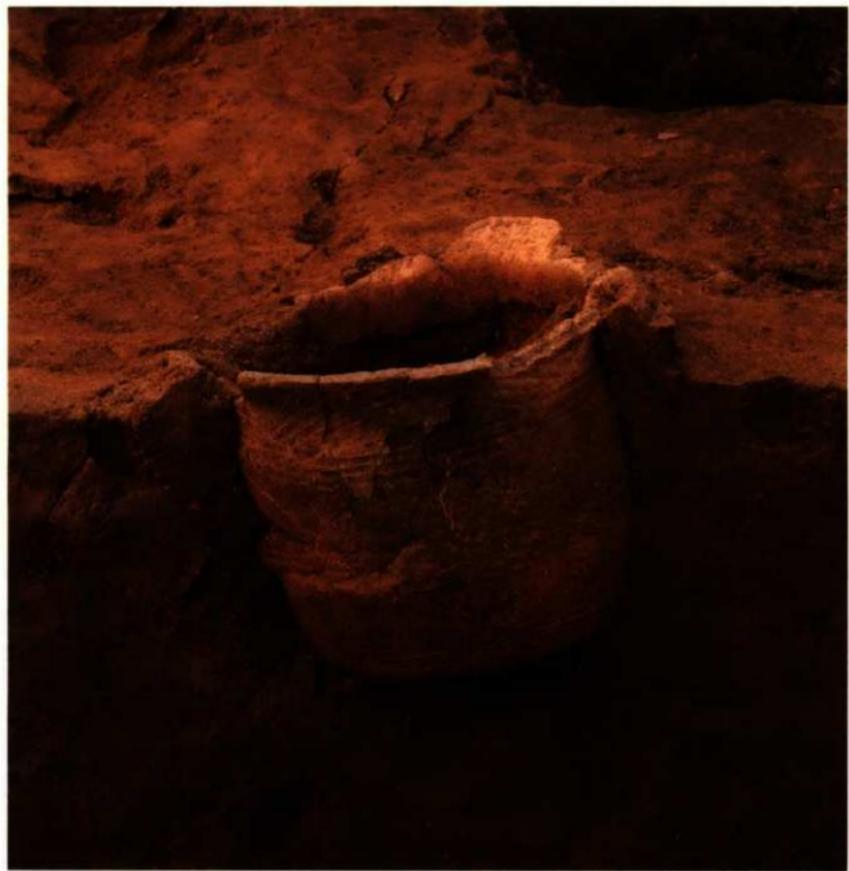
KAMIINOHARU

# 上猪ノ原遺跡 -1-

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書

2002

清武町教育委員会



塞ノ神式土器 出土状況

# 序

本書は、清武町船引地区で進められている県営農地保全整備事業に伴い、平成13年度事業地で実施した上猪ノ原遺跡の発掘調査概要報告書です。

今回で7年目をむかえる本事業に伴う発掘調査では、先人たちの生活が想像できる貴重な資料が数多く確認されました。例年充実した資料を得ることの出来る縄文時代早期はもとより、幅広い時代で資料が得られ、なかでも土器出現からまもないころの貝で文様を施した土器や、弥生時代の竪穴式住居跡、又平安時代の掘立柱建物跡などは注目に値します。

今後、これら先人たちの残した文化遺産が、21世紀を担う子供たちへ着実に継承されるとともに、子供たちの豊かなこころを育む教育の場に、「生きた資料」として活用されることが出来れば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御協力をいただきました船引土地改良区をはじめとする地元の皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

清武町教育委員会

教育長 湯 地 敏 郎

# 例　　言

1. 本書は、県営農地保全事業(船引地区)に伴う、上猪ノ原遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体　　清武町教育委員会

事務局

教育長　湯地敏郎

教育次長　田宮防太郎

社会教育課長　川越繁美

社会教育課文化係長　川越健

調査員

社会教育課主査　伊東但

社会教育課主事　井田篤

社会教育課嘱託　秋成雅博(H13.4~)

社会教育課嘱託　安楽哲文(H.12.12~H.13.3)

3. 図面の作成は井田・秋成・安楽他、

(以上 実測補助員)、錦井良子、田子さやか、田上智也、

木谷彰人(以上 宮崎大学)、宮崎真琴、中村圭一、中嶋亜希子(以上 宮崎国際大学)が行った。

4. 遺物、図面の整理は、(仮称)清武町埋蔵文化財センターにおいて、井田・秋成及び

(以上 整理作業員)が行った。

5. 挿図の拓本、トレースは船石、沼口、若藤、衛藤が行った。

6. 本書に使用した写真は、井田、秋成、安楽が撮影し、空中写真については(株)スカイサーバイに委託した。

7. 本書に使用した記号は次のとおりである。

SI:集石遺構 SC:土坑(陥し穴も含む) SA:竪穴式住居跡 SB:掘立柱建物

8. 本書に使用した方位は磁北で、レベルは海拔絶対高である。

9. 基本土層や遺構埋土の色調については、「新版 標準土色帖」(1997年後期版)の土色に準拠した。

10. 書の編集・執筆は、第1章・第2章(第1節~第4節)・第4章については井田が、第2章(第5節)・第3章については秋成が行い、文責は目次に示した。

# 目 次

第1章	はじめに	(井田)	1
第1節	調査に至る経緯		1
第2節	立地と環境		1
第3節	調査の概要		4
第2章	遺構について		5
第1節	集石遺構	(井田)	5
第2節	連穴土坑	(〃)	7
第3節	陥し穴	(〃)	7
第4節	竪穴式住居跡	(〃)	7
第5節	掘立柱建物跡	(秋成)	8
第3章	出土遺物について	(秋成)	10
第1節	土 器		10
第2節	石 器		10
第3節	土製品		10
第4章	まとめ	(井田)	11
調査抄録			
上猪ノ原遺跡			14

## 挿図目次

第1図 位置図(1/50000).....	2
第2図 上猪ノ原遺跡周辺地形図(1/1200).....	3
第3図 上猪ノ原遺跡基本土層図(1/30).....	4
第4図 上猪ノ原遺跡遺構配置図(1/1200).....	9

## 図版目次

図版1 上猪ノ原遺跡基本土層断面.....	4
図版2 SI-31①.....	5
図版3 SI-31②.....	5
図版4 SI-31③.....	5
図版5 SI-15.....	5
図版6 SI-18・19.....	5
図版7 SI-43①.....	6
図版8 SI-43②.....	6
図版9 SI-52.....	6
図版10 SI-9(検出).....	6
図版11 SI-4.....	6
図版12 SI-49.....	6
図版13 SC-17・19.....	7
図版14 SC-23.....	7
図版15 SA-5.....	7
図版16 SB-2～SB-6.....	8
図版17 上猪ノ原遺跡出土遺物①.....	12
図版18 上猪ノ原遺跡出土遺物②.....	13

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

平成7年度より行われている清武町船引地区の県営農地保全整備事業に伴い、事業区の一部に上猪ノ原遺跡が含まれることが確認された。遺跡の取り扱いについて宮崎県中部農林振興局と慎重に協議したところ、耕作土の確保等の事業設計上の理由により、やむを得ず削平されることとなった部分において発掘調査を行い記録保存することとなった。

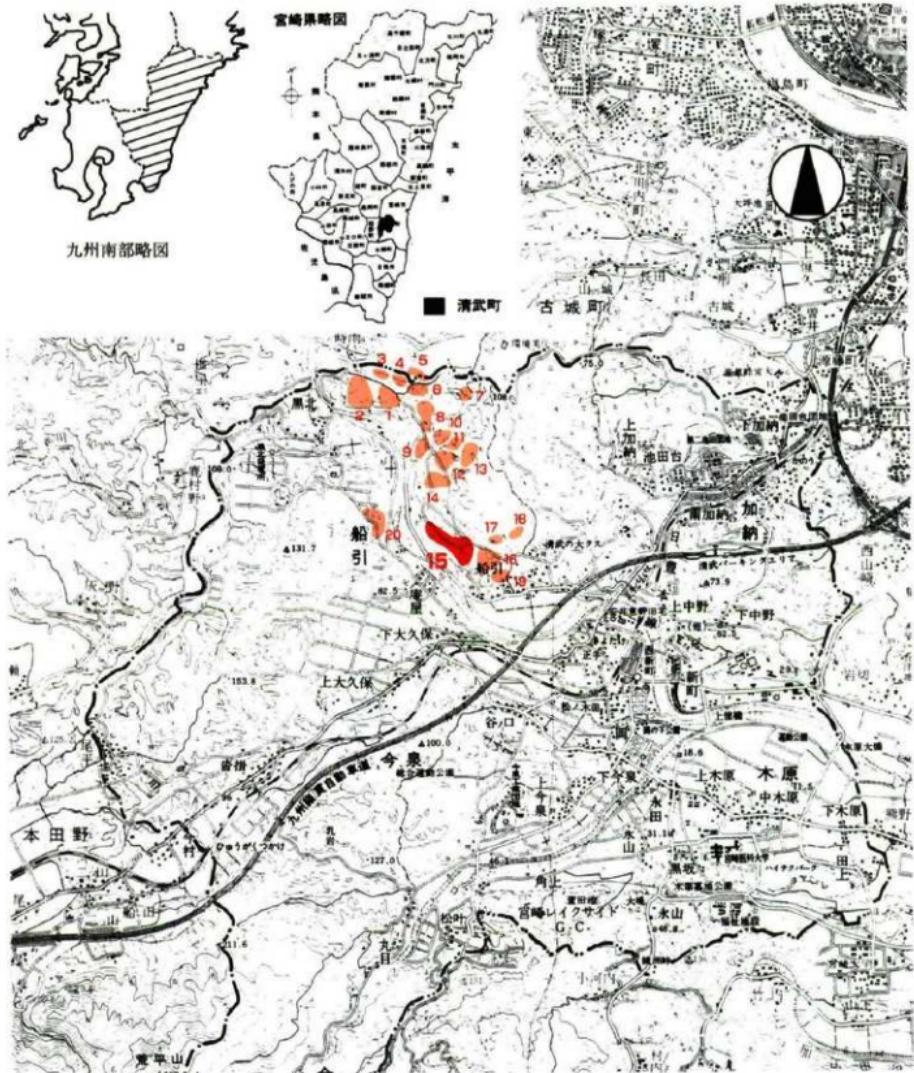
調査は宮崎県中部農林振興局の委託を受け清武町教育委員会が実施し、期間は平成12年12月11日から平成13年11月6日まで、調査面積は約14,000m<sup>2</sup>である。

## 第2節 立地と環境

清武町は県央宮崎平野の南西部に位置し、県庁所在地である宮崎市の南西に隣接している文教田園都市である。幕末から明治にかけて活躍した安井息軒を生んだ好学の風潮は今もなお健在で、現在では町内の文化財の保存及び公開の施設として、安井息軒生家前に(仮称)きよたけ歴史館が建設中である。又、上猪ノ原遺跡は町北西部の船引地区に所在しているが、当地区には国の天然記念物に指定されている清武の大楠や船引神社など、数多くの有形・無形の文化財が現在でも残っている。

本遺跡は、町内を流れる清武川左岸の標高約70m～75mのシラス台地上の西端部に位置しているが、調査区の大部分は削平を受けている状況であった。

近隣には、宮崎県教育委員会が調査を行い、縄文時代後期及び古墳時代中期の竪穴式住居跡や、中世から近世にかけての掘立柱建物跡などが検出された上ノ原第1・2・3・4遺跡、カマドを有する竪穴式住居が検出され、当台地上で営まれた古代の小規模集落の存在が確認された白ヶ野第2・3遺跡、又当教育委員会が調査を行い、旧石器の剥片や縄文時代早期の装身具などが出土している白ヶ野第1・第4遺跡、直径約2.3mの掘り込みをもつ巨大な集石遺構や逆茂木痕をもつ陥し穴遺構などをはじめとして、旧石器から中世まで幅広い時期の遺構や遺物が確認された滑川第1・第2・第3遺跡、縄文時代早期の集石遺構・連穴土坑・陥し穴が確認された山田第2遺跡・坂元遺跡、又今後の調査が予想される下猪ノ原遺跡などが所在する。



- 1.上ノ原第1遺跡 2.上ノ原第2遺跡 3.上ノ原第3遺跡 4.上ノ原第4遺跡 5.白ヶ野第3遺跡  
 6.白ヶ野第2遺跡 7.白ヶ野第4遺跡 8.白ヶ野第1遺跡 9.滑川第1遺跡 10.滑川第3遺跡  
 11.滑川第2遺跡 12.山田第1遺跡 13.山田第2遺跡 14.坂元遺跡 15.上猪ノ原遺跡  
 16.下猪ノ原遺跡 17.札立第2遺跡 18.札立第1遺跡 19.園田遺跡 20.椎現原遺跡

第1図 位 置 図 (1/50000)



第2図 上猪ノ原遺跡周辺地形図 (1/1200)

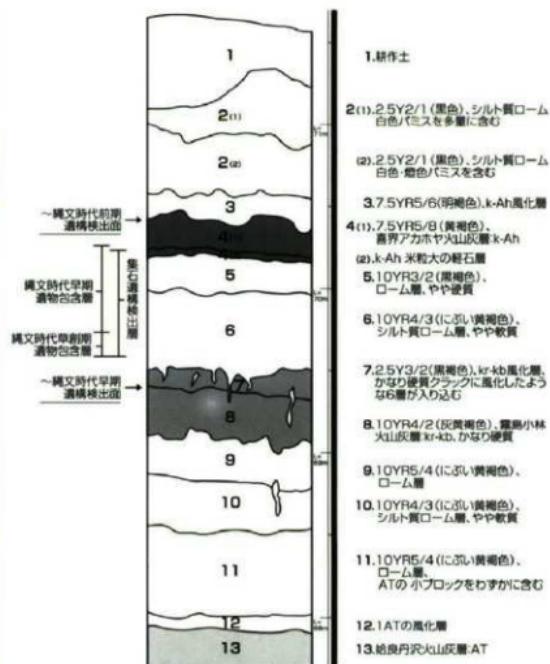
### 第3節 調査の概要

本遺跡では、地元地権者の耕作の都合により、収穫が終了した畑を順々に4段階に分けて調査を実施した。

調査では、まず重機による表土の剥ぎ取りを行ったが、アカホヤ火山灰層(4層)から始良丹沢火山灰層(13層)[第3図 上猪ノ原遺跡基本土層図参照、尚今後使用する層位についても同様]にかけての様々な層が既に露出している状況であった。調査は、アカホヤ火山灰層が残存している範囲における、その上面での縄文時代前期以降の遺構の検出作業から行ったが、堅穴式住居跡や掘立柱建物跡が検出されたため遺構の記録作業を実施、その後重機により4<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup>層を除去し、縄文時代早期・草創期の遺物包含層であり、また集石遺構が確認される可能性の高い5層から6層を人力で掘り下げていった。集石遺構以外の縄文時代早期・草創期の遺構については、6層での検出が困難だったため、霧島小林火山灰層上面(9層)で検出作業を行ったが、陥し穴が7基、連穴土坑が9基確認された。また旧石器時代の調査も一部実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。



図版1 上猪ノ原遺跡基本土層断面



第3図 上猪ノ原遺跡基本土層図(1/30)

## 第2章 遺構について

### 第1節 集石遺構

今回の調査では、5層下位から6層下位にかけて計59基の集石遺構が確認された。まず5層下位から6層中位においては、掘り込みを持ち、埋土には炭化粒・炭化物を含み、充填されている礫の密度が濃い集石遺構が23基検出された。そのなかには、人頭大の扁平な礫を数個掘り込みの底に敷きつめるように配し、その上に礫が充填されているもの(図版2・3・4 SI-31)と、敷石は配さずに最下位の礫と掘り込みの底との間に10cm~20cm程の埋土が堆積しているもの(図版5 SI-15)が確認された。又掘り込みが明瞭で、埋土には炭化粒・炭化物を含んでいるが、充填されている礫が疎らな集石遺構も数基あったが、このタイプの集石遺構は他の集石遺構と隣接もしくは切り合うケース(図版6 SI-18・19)が多く、単体ではほとんど検出されていない。



図版2 SI-31①



図版3 SI-31②



図版4 SI-31③



図版5 SI-15



図版6 SI-18・19

又、連穴土坑の掘り込みを利用して構築したのではないかと推測される集石遺構も1基(図版7・8 SI-43)検出され、同じ状況が確認された坂元遺跡ともども今後検討を加えていきたい。その他にも、浅い大きな掘り込みを持ち、多量な礫が充填されている集石遺構(図版9 SI-52)や、掘り込みがやや不明瞭で、充填されている礫が疎らな集石遺構(図版10 SI-9)、又、掘り込みを持たないが礫の堆積が人為的な可能性のある集石遺構(図版11 SI-4)、など様々な集石が確認されている。又、6層下位においては、掘り込みが不明瞭で敷石も無く、炭化粒・炭化物もみられない小型の集石遺構(図版12 SI-49)が1基検出された。付近では同じ6層下位から縄文時代草創期に該当する貝殻押圧文土器や隆帶文土器が出土しており、この集石遺構がその時期に使用された可能性が高いと推測される。



図版7 SI-43①



図版8 SI-43②



図版9 SI-52



図版10 SI-9(検出)



図版11 SI-4



図版12 SI-49

## 第2節 連穴土坑

6層上位から7層上面にかけて、縄文時代早期のものと思われる連穴土坑が9基検出された。5基が単体で検出され、残りは2基が切り合った状態のものが2組検出された。又、9基すべてのブリッジ部は残存しておらず、そのうちの数基で、崩落の痕跡が埋土から伺えたのみであった。単体の連穴土坑は、平面プランが舟形を呈していて(長軸1m~2m、短軸0.5m~1m)、煙道は斜めに掘られており、足場から燃焼部までの床面が下降しているタイプのもので、近隣の滑川第1遺跡でも確認されている。又、切り合った連穴土坑については、片方は先述の単体のものがYの字に繋がった状態で検出され、これは単体のものを拡張しながら使用したケースだと推測される。もう片方は、長軸3.5m、短軸1.5mの大型のものと、長軸1.5m、短軸0.5mのものが切り合った状態で検出されたが(図版13 SC-17・19)、切り合う方向や規模の違いなどからみて、拡張して使用されたケースとは考えにくい。

## 第3節 陥し穴

6層上位から7層上面にかけて、縄文時代早期のものと思われる陥し穴が7基(図版14 SC-23等)検出された。平面プランが円形・橢円形・長楕円形、検出面からの掘り込みの深さが0.5m~1.1m、逆茂木痕と思われる小穴の数が2個から10個、とほとんどの陥し穴で構造が異なっており、構築された時期や配置の意図に、それぞれなんらかの違いがあるのではないかと推測される。

## 第4節 壺穴式住居跡

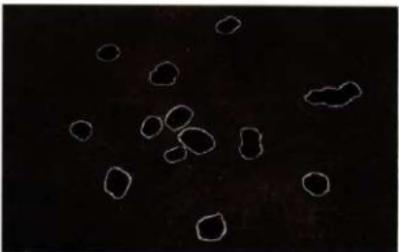
5層上面で隅丸方形の壺穴式住居跡が1軒検出された。床面積は約16m<sup>2</sup>で、柱穴は住居の中央に2ヶ所、東西壁面の中央に1ヶ所確認され、床面の西端には壁帶溝が、南側には土坑が確認された。



図版13 SC-17・19



図版14 SC-23



図版15 SA-5

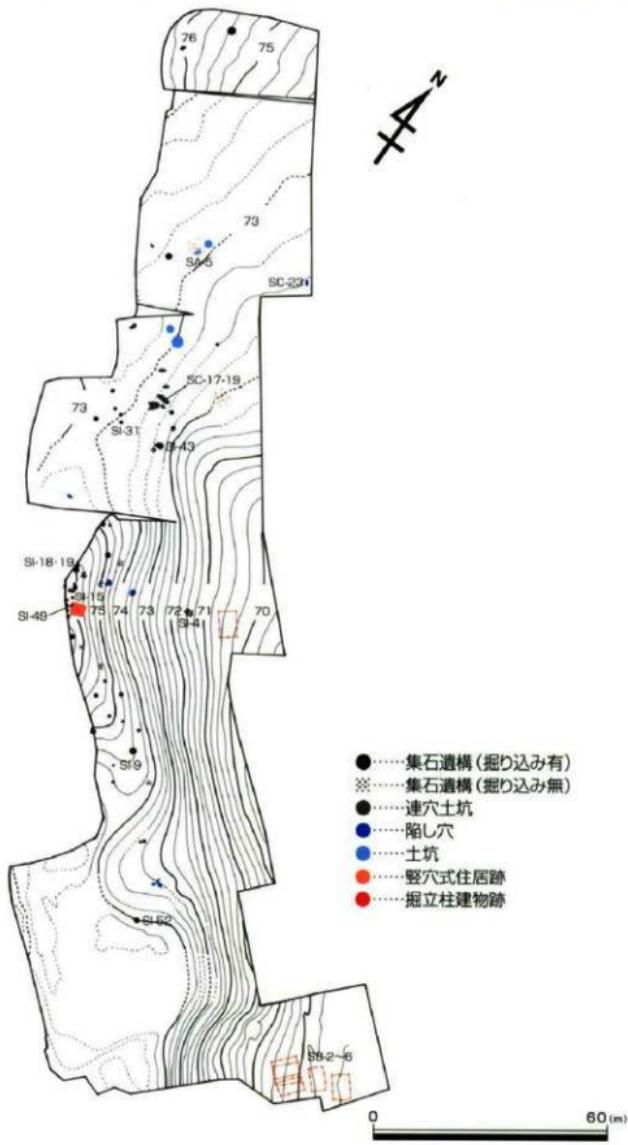
又、6層上面では、円形に支柱が並ぶ住居跡が、上部構造は削平され柱穴のみではあるが2軒検出された(図版15 SA-5)。柱穴は直径約5mの円状にほぼ等間隔で7ヶ所(2本が切り合っているものもある)配してあり、円の中央にもやや浅めのピットが數本確認されている。隅丸方形及び円形いずれのタイプの住居跡からも、弥生時代後期初頭の土器(中溝式土器など)が出土しており、これらの住居がその時期に構築された可能性が高いと推測される。

## 第5節 掘立柱建物跡

調査区東側の斜面の傾斜がなだらかになるところで6棟の掘立柱建物跡(図版16 SB2~SB6等)を検出した。検出された建物はいずれも桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で、長軸を東西に向けるものと南北に向けるものと見ることができる。建物の規模については全ての建物の桁行が6.5mであるが、梁行については3.5m前後のものと4.5m前後のものとの2種類あり、床面積も梁行の差により22m<sup>2</sup>前後のものと30m<sup>2</sup>前後のものとが存在する。これらの建物の柱穴からは、布痕土器や底部回転ヘラきりの土師器の杯、内黒の黑色土器、管状土錐などの遺物が出土している。



図版16 SB-2~6



第4図 上猪ノ原遺跡 遺構配置図(1/1200)

## 第3章 出土遺物について

### 第1節 土 器

土器は5層から7層にかけて出土している。当遺跡において東側に下る斜面からは5層、6層より塞ノ神式土器を主体に岩本式土器、前平式土器、押型文土器、平柄式土器などが出土した。また、7層においては草創期に該当すると考えられる貝殻押圧文土器や隆蒂文土器が出土している。

西側へ下る斜面については遺物包含層の残存状況が悪く、約23m程度しか調査を行うことが出来なかった。5層における土器の出土は見られず、6層から貝殻文系土器(知覧式)のみが出土した。

東側に下る斜面と西側に下る斜面の縄文時代早期の包含層から出土した土器を比較すると、東側に下る斜面からは多くの土器形式が出土しているのに対し、西側に下る斜面については調査面積の狭さから土器の出土量は多くないが、知覧式土器しか出土していないという状況が伺えた。このことから当遺跡における縄文時代早期の包含層については東側に下る斜面と西側に下る斜面との間に時間的な相違が存在する可能性が考えられる。

### 第2節 石 器

石器は5層から7層にかけて出土している。石鎚、石錘、スクレイバー、石斧、敲石、磨石、剥片、石核などが出土した。石鎚、石錘などの小型の剥片石器には黒曜石、頁岩、チャート、流紋岩、細粒砂岩などの多様な石材の利用が見られる。スクレイバーには細粒砂岩、頁岩の使用が目立つ。また、出土する剥片類、石核の多くは硬質の細粒砂岩や頁岩を使用しており、縄文時代早期の当遺跡における使用石材の主体を占めている。

一方、礫石器である敲石、磨石については一部に尾鈴酸性岩製のものが見られるが、そのほとんどのものが剥片石器に使用する砂岩とは異なる軟質の砂岩の円礫を使用している。

### 第3節 土 製 品

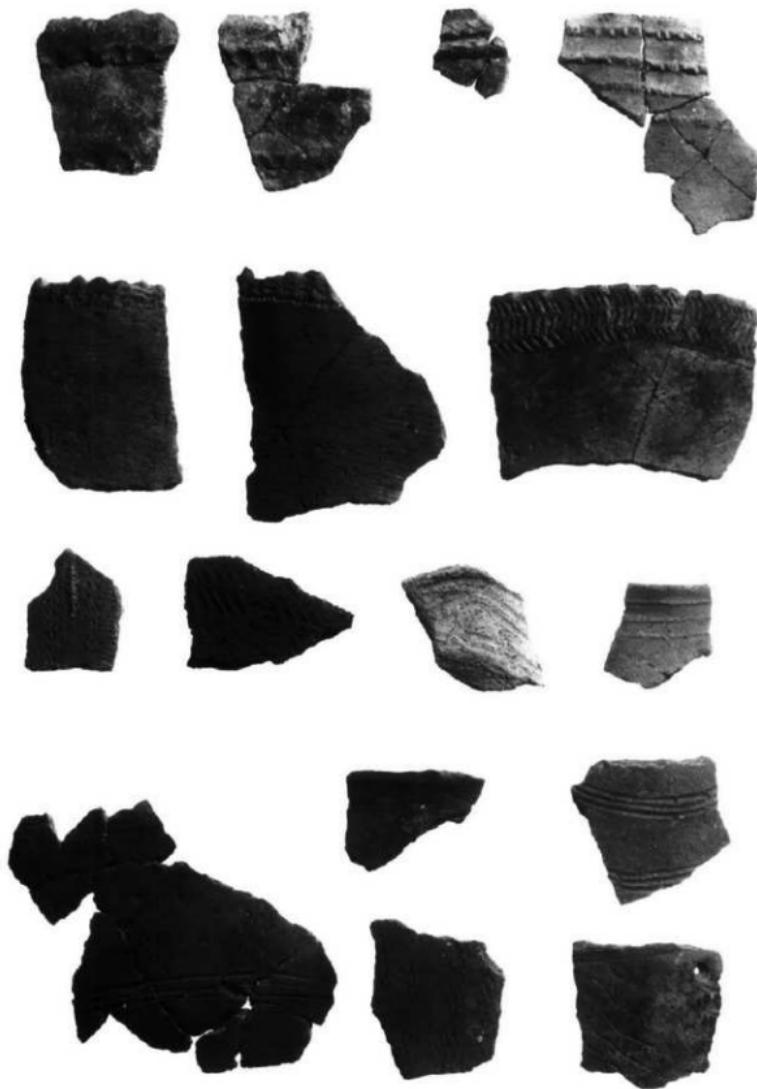
土製品は耳飾りが5層から6層にかけて出土している。全て環状を呈する輪状耳栓で、外面に抉りを持っている。内面には稜線を持つものと持たないものがあり、端部に刻み目を入れるもの、内面に沈線文をもつものや赤色顔料を塗布しているものがある。

## 第4章 まとめ

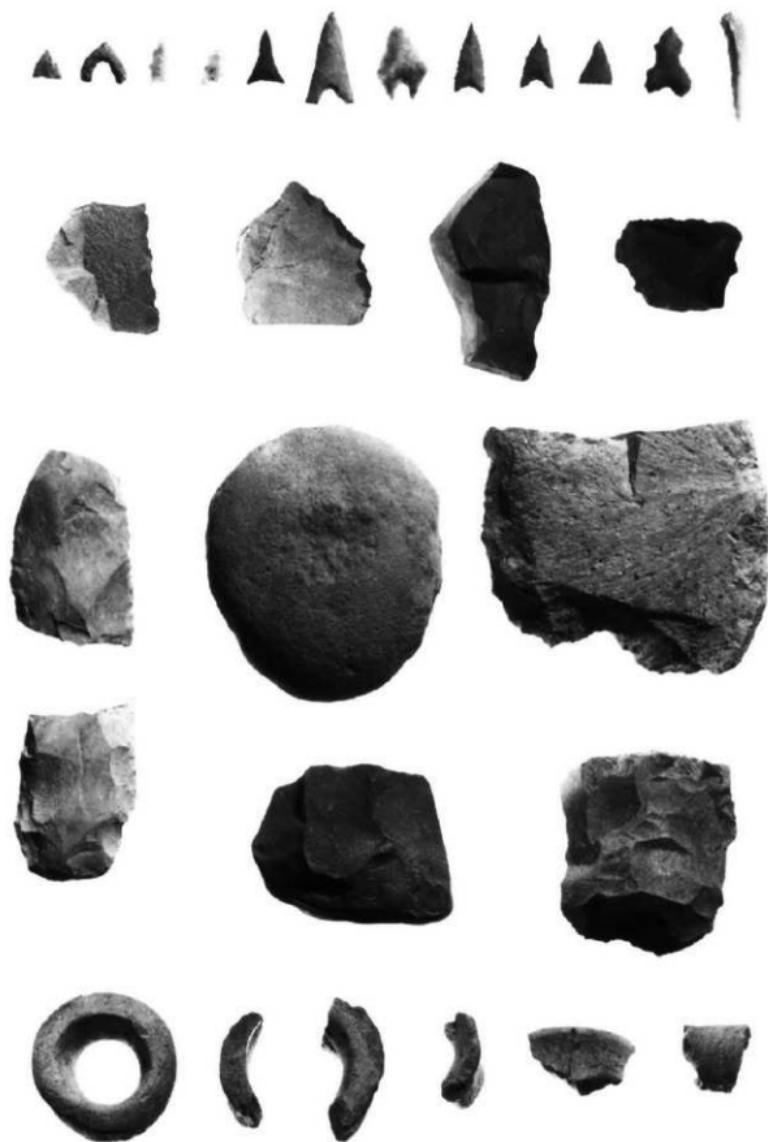
当遺跡付近では、昭和20年代前半ごろに大規模な削平工事が行われたため、調査区14,000m<sup>2</sup>のうち11,000m<sup>2</sup>がアカホヤ火山灰層より下位での調査のみが可能な状況であった。なかでも、遺跡の残りが良好と思われる当台地西端の丘陵尾根部の大半が削平されており、遺跡の立地を踏まえた上でその考察は現時点では行いにくい。ただし、今後調査の予定される範囲には、今回の調査区でも大部分を占めた東側へ下る斜面に加え、西側へ下る斜面も広く含まれているので、立地を踏まえた上で遺跡の性格がより鮮明なものになるのではないかと期待される。

縄文時代早期のものと推測される集石遺構については、様々なタイプのものが確認されたが、これは集石遺構が最終的に放棄される直前の状態の多様さがその主たる要因ではないかと推測される。そこで今回は、掘り込みを持つタイプの集石遺構について、想像できる最終使用状況を幾つか挙げてみることにした。“地面を掘り込み蒸し焼き料理を行い、その後そのまま放棄”“地面を掘り込み蒸し焼き料理を行い、その後まだ使用できる礫を他の集石に移して放棄”“地面を掘り込み蒸し焼き料理を行っている集石に礫を補充するために、地面を掘り込み礫を焼き、礫を補充後もしくは補充中にそのまま放棄”などいろいろなケースが想像できるが、この多様さを整理検討していくことが集石の使用状況を明確にすることに繋がるのではないかと考えられる。尚、集石が使用された時期に幅があることも、様々なタイプの集石遺構が確認される要因の一つだとは推測されるが、今回の調査では塞ノ神式土器の出土が他と比較して際立っていたため、幅の広い時期差は考えにくく、今回は集石の最終使用状況の多様性を中心に考察を行った。その他の縄文時代早期の遺構についても、滑川第1遺跡のものとほぼ同じプランの3.5mを超える連穴土坑や、復元した掘り込みの深さが1mに満たない浅い陥し穴、又、竪穴式住居跡の可能性が考えられる竪穴状遺構など、注目される事例が幾つか確認されている。今後はこれらの資料を、当台地上に立地する他遺跡の調査で確認された、数多くの縄文時代早期の資料と比較検討した上で、台地全体を視野に入れた考察が必要となってこよう。

又、弥生時代後期の中溝式土器などが出土した隅丸方形及び円形の竪穴式住居跡や、柱穴から布痕土器や底部回転ヘラ切りの土師器の杯、内黒の黒色土器、管状土錐などの遺物が出土した6棟の掘立柱建物跡については、当台地上での調査事例が少ないので、今後詳細な調査及び検討を実施していきたい。



図版17 上猪ノ原遺跡出土遺物①



図版18 上猪ノ原遺跡出土遺物②

## 調査抄録

フリガナ	カミイノハル					
書名	上猪ノ原遺跡					
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書					
巻次	第1集					
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第10集					
編集者名	井田篤・秋成雅博					
発行機関	清武町教育委員会					
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地					
発行年月日	2002年3月					
所在遺跡名	所在地	市町村:遺跡番号	北緯	東経	調査期間	
上猪ノ原遺跡	清武町 大字船引字 上猪ノ原	清武町:205	31° 51'55" 4806	131° 22'12" 5587	H12.12.11 H13.11.6	?
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
14,000m <sup>2</sup>	農業関連	集落	縄文 弥生 古代	集石遺構・階し穴・達穴土坑 竪穴式住居跡 掘立柱建物跡 等	縄文式土器・弥生式土器 土師器 石器 等	

